

内92-35

早稲田大学大学院理工学研究科

博 士 論 文 概 要

論 文 題 目

ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージの
建築家活動に関する研究
ラテラーノ大聖堂の内陣増改築計画をめぐる論考

申 請 者

岡 田 哲 史

Satoshi Okada

建設工学専攻 建築計画研究

平成 4 年 12 月

ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージは、今日一般に銅版画家として著名であるが、実際には建築家としても活動していた。本論文は、ピラネージが1763年から67年にかけて携わっていたサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂の内陣増改築計画に関する建築計画をめぐり、コロンビア大学エイヴリー・ライブラリー（建築図書館）が所蔵する図面を分析考察することによって、この芸術家の建築家活動を系統的に論述し解明するものである。

ピラネージに関する研究は、19世紀の後半に端を発するが、学術研究の対象として詳細に語られ始めたのは20世紀に入ってからのものであった。フランスのオンリ・フォションによるピラネージ研究を先駆的存在として、それ以降今日に至るまで「ピラネージ」はおびただしい数の論文や著書をつうじて紹介されてきたのである。しかしながらその大半は、ピラネージの銅版画家としての偉業を讃えるものであり、建築家ピラネージの才能を枢軸として論述の対象とする研究は数えるほどしか存在しなかった。

建築家としてのピラネージをめぐる研究が本格的に始められたのは、1950年代に入ってからのものである。ルドルフ・ウィットコウワの『パレーレ』に関する論文によってピラネージの建築家としての思想が浮き彫りにされ、その後エミール・カウフマンの著書によってこの研究に拍車をかける契機がもたらされたのである。このうちピラネージの建築作品そのものを詳細に扱い、その質を高く評価しはじめたのはウィットコウワであった。ピラネージはその生涯において二つの建設計画に携わっていたが、今日も存在するサンタ・マリア・デル・プリオラート教会堂については、建設記録書を含めてスケッチや図面などの優れた資料が少なからず残されていた。したがって、これを研究の主要材料としたウィットコウワは、それまで軽視されがちにあった「建築家としてのピラネージ」に一躍脚光を浴びせ、建築家ピラネージに対する再認識を世界に促したのである。

ところがラテラーノ大聖堂の内陣増改築計画については、1748年にフェリス・スタンプルが著した論文によりそのスケッチの存在が確認されてはいたものの、精緻な分析論究を導くための設計図書は発見されないまま1970年代を迎えていた。したがって、1960年代後半のとりわけマンフレッド・フィッシャーに代表される秀逸な論考も、必然的にその大部分を推測に頼らざるを得ず、不十分な論述を余儀なくされていたのである。ラテラーノ大聖堂の内陣増改築計画に関するピラネージの図面が、ニューヨーク・コロンビア大学のエイヴリー・ライブラリーに収蔵されたのはウィットコウワ博士が他界した1971年のことであった。このため、結局ラテラーノ大聖堂に関する図面はこの巨匠によって語られることなく、1972年の展覧会カタログにてドゥローシア・ニibelグが記した僅かな図面解説以降、詳論や新説をみないまま今日に至っている

のである。

ラテラーノ大聖堂内陣増改築計画に関する図面は、ピラネージの建築家活動をめぐる研究を充足させるうえで不可欠な資料であり、重厚なるピラネージ研究にあって唯一今日まで残されてきた研究課題といっても過言ではない。幸いにもこの資料を仔細に観察する機会に恵まれた本研究は、図面図書の詳細なる分析と考察をとおして計画に反映するピラネージの建築家としての姿勢すなわち設計の理念、手法、趣向を論じる。そして建築家ピラネージに関する研究のさらなる展開にとって一つの方向性を提供すること試みているのである。

□

本論文の構成は次のとおりである。

第1章は、ピラネージが生きた18世紀のイタリアについて、歴史的、地勢的、社会的背景を概説する。第1節では、衰退してゆくイタリア諸国家と諸外国との関係について触れ、18世紀のヨーロッパ世界に萌芽した啓蒙主義思想のイタリアへの影響について述べている。第2節では、ピラネージが生まれ育ったヴェネツィアを中心に記し、ピラネージの建築教育、さらにはヴェネツィア社会の文化と建築との関係性について紹介している。第3節では、ピラネージがヴェネツィアを離れ活動し始めたベネディクトゥス14世統治下のローマ社会を描写し、考古学や舞台設計などをとおして吸収した建築的素養について説明している。

第2章は、18世紀ローマの建築界と、そこで育まれたピラネージの建築観について論じる。第1節では世紀前半の建設事業を概説し、ピラネージが訪れたローマの建築事情を紹介する。第2節では、ピラネージが関係をもった二つのアカデミー、すなわちアカデミア・ディ・サン・ルーカとローマのフランス・アカデミーをとりあげ、ピラネージとこれらの芸術家養成機関との交流と相互の影響関係を考察する。そして第3節では18世紀半ばに建築の世界においても芽生えた啓蒙思想を紹介し、第4節で、その影響下にあったピラネージが自ら論じた著をつうじてピラネージの建築論を論じる。

第3章は、ラテラーノ大聖堂に関する紹介と、ピラネージにこの聖堂の内陣増改築計画が委託された当時の社会状況を描写する。第1節では、ラテラーノ大聖堂の歴史を俯瞰し、ピラネージが携わる内陣増改築計画までの経緯を概説する。第2節では教皇クレメンス13世が統治した教皇国家の社会経済情勢を紹介し、その状況下における教皇の建設事業と文化事業について説明する。そして第3節では前節で調査した社会

的背景から推察され得る内陣増改築計画未完の原因を究明している。

第4章は、ピラネージがラテラーノ大聖堂内陣増改築計画に際して提出した正式な提案図面に関する詳細な分析と考察を紹介する。第1節では、ピラネージが提出した25枚の図面を俯瞰し、それらを提案内容の性質上6種類の計画案に範疇分類することが可能であることを提示する。そして第2節では、個々の図面に関する詳論とともに、6種類の計画案の変遷を紹介している。これまでのところ各図面に関する包括的な紹介は、1971年のニイベルグが執筆したカタログにおける簡単な解説をおいて他にはないが、ここで説明された内容にも図面の誤った観察に基づく誤解が認められ、しかも全体的に見て必ずしも体系的にまとめられた著としては評価することができない。したがって本論では、ニイベルグの功績をも含めて批判の対象とし、最初の図面から順に詳論を試みている。この場合、上記のとおりピラネージの計画は6種類の計画案に分類することができるため、各々の計画案とそこに帰属する図面を一セットとして、各計画案とその図面とが明解にわかるかたちで論を進めている。

第5章は、前章で系統的に分類した計画案のそれぞれが内包する建築的要素を手がかりに、その系譜を歴史的に辿ることによって、建築家ピラネージが当時いかに斬新で空想的なデザインを志向していたとはいえ、現実に提案した建築計画が古代以来建築家のあいだに脈脈と受け継がれてきた古典主義建築にその多くを負っているという事実を明らかにする。この論究の手段として注目しているのはコロonnart（列柱）である。第1節では内陣増改築計画の第3の計画案で提案されたコロonnartについて説明し、第2節から第3節にかけて、歴史上のコロonnartの計画が18世紀からローマ・ルネッサンス期の巨匠ブラマンテの計画図面にまで遡ることを明らかにしている。第4節では、コロonnartの計画がイタリアのみならず18世紀のフランスにおいても同時代的な現象として現れていたことに着目し、ピラネージとフランス建築との関係性を試論する。そして第5節では、ピラネージが重視していた装飾をとりあげ、「装飾の現代性と古典性」と称してピラネージが伝統の中から踏襲していた装飾と、その18世紀建築への適用性の評価と意義について論じている。

以上のように本論文は、これまでの「ピラネージの建築家活動に関する研究」の中でほとんど未開拓の部分で、ラテラーノ大聖堂の内陣増改築計画に携わったピラネージの業績とそこに至るまでの建築家としての軌跡を論じることにより、18世紀における建築家としての社会的存在を明らかにした。そして、空想的な建築を描く芸術家あるいは新古典主義的建築家として著名なピラネージが、実は極めて現実的で古典主義的な建築家であったことを結論として提示するものである。